

# デジタルこうち推進協会レポート⑦

## 中山間部の自主共聴施設の地デジ化作戦

離島以外の市町村では全国で一番人口が少ない四国の水がめ早明浦ダム湖に沿った地域である大川村（4月30日現在で人口477人）では、年明けからデジタル化改修事業が進み、6月には二つの自主共聴施設で地上デジタル放送が見えるようになった。NHK共聴の施設は平成20年度で改修をしている。

文：川竹大輔 Kawatake Daisuke  
NPO法人デジタルこうち推進協会 専務理事



昭和44（1969）年生まれ。朝日新聞記者、三重県津市議会議員をへて、平成12（2000）年から橋本大二郎高知県知事の特別職秘書、安芸市助役を務める。平成18（2006）年からデジタルこうち推進協会専務理事。

# それぞれの地域の課題を背負って デジタル化 ～山間部～

## 標高差のある集落を抱える地域

村全体の240世帯を対象にした国土交通省の光ケーブルと、無線LANを活用したブロードバンド化を目指す工事と並行した時期のデジタル化改修工事だ。デジタルこうち推進協会準備に取り組んだ朝谷地区（9戸）と大北川地区（12戸）の二つの共聴改修工事は、中央構造線に近い地すべり地帯特有のもろい岩に柱を立てていく岩盤工法を採用した現場もあって、なかなか難航した。今年は4月中旬にも雪が積もるといふ、高知のなかでも気象条件の厳しい地域だ。

また、ようやく完成できるかなと見込んでいた矢先、宮崎県で流行が始まった口蹄疫問題の影響で、牛の放牧場周辺に立ち入っての工事が大きく制限されることもあった。放牧場そばの受信点施設は、牛の力でも壊れないよう柵で頑丈に囲わないといけないので、その手間もかかった。

大北川地区の共聴組合（川村純史



大北川地区の川村純史組合長



水谷集落（標高800m）の共同受信施設

組合長）は、これまでは水谷集落と大北川集落と二つの施設に分かれていた共聴施設を、工事のコストを検討した結果、まとめたほうが改修後の維持管理もしやすいという理由で統合した。人口減少の続く山間部では、3カ所の共聴施設を統合した地域もある。川村組合長は協同組合木星会という葉形のテーブルのような自然家具の木工品を製造販売する地元グループのリーダーとして、県外からの注文や出張があるので、村の事業で進めた無線LANでのブロードバンド化を心待ちにしていた一方、高齢者の最低限のインフラとしての地デジ改修に期待をかけてくれた。

大北川地区の12世帯は、山間部の標高差200mほどの地域に家が散在しているため、これまでは古い共聴施設でのアナログ受信も不安定なときがあったというが、今回の改修には「テレビがよく見えるようになったと好評で、地デジ対応テレビやチューナーを買ったという話を聞いていますよ」と組合長には好評だ。延長距離の長い共聴施

設では、同軸ではなく光ケーブルを採用している。標高の高い集落と低い集落の間の急斜面は、迂回して通る舗装道路沿いではなく、車のない時代に人が歩いていた道筋をたどってケーブルを埋設している。

## 受信点は標高1,160mの山頂

もうひとつの共聴施設改修をした朝谷地区は、昭和46（1971）年に白滝銅山が閉山するまでは学校や映画館もあった地区だが、今は畜産と農業の施設と、自然教育センターが集落に残る。

標高940mにあるアナログ電波に対応した受信点だとデジタル電波が受けられず、標高1,160mの山頂にある新しい受信点はこれまでの受信点から1km以上離れているため、平成21年度に総務省が補助を手厚くした制度の対象になって、1km以上の部分は国の全額補助でデジタル化改修が進んだ。

ひとつひとつの自主共聴施設がそれぞれの地域の課題を背負って、デジタル化への対応をしているのが、山間部の現場だ。



組合長に工事報告